第１回
講　演　者：三ツ井　崇 氏（東京大学　教授）
講 演 題 目：朝鮮近代史叙述における「文化史」の位置づけをめぐって
―植民地期を中心に―
日　　時：2023 年 7 月 13 日（木）　午後 6 時 30 分～8 時

【講師プロフィール】

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻　教授
1974 年生まれ。福井県出身。
専門は、朝鮮近代教育・文化史、言語社会論。近現代朝鮮における言語・文化政策／運動の展開過程や近代学問形成の政治的文脈などについて研究するほか、植民地期の民族運動全般や対日協力問題にも関心を持っている。
著書に、『朝鮮植民地支配と言語』（明石書店、2010 年）、『식민지 조선의 언어 지배 구조: 조선어 규범화 문제를 중심으로』（소명출판、2013 年）、『世界歴史大系　朝鮮史２　近現代』（共著、山川出版社、2017 年）、『韓国朝鮮の歴史と文化―古代から現代まで―』（共著、一般財団法人放送大学教育振興会、2021 年）、『植民地朝鮮のラジオ放送―近代マスメディアとしての京城放送局（JODK）―』（共編著、金沢文圃閣、2023 年）など。

司会（六反田豊氏）：それでは、所定の時刻になりましたので、只今から 2023 年度第一回の東京大学コリア頃キュアム講座を始めたいと思います。本年度も数回の開催を予定しておりますので、どうぞよろしくお願いいたしします。

私は、司会を担当します東京大学・人文社会系研究科の六反田と申します。よろしくお願いします。

初回に当たります本日は、東京大学・総合文化研究科の教授でいらっしゃいます三ツ井崇先生をお招きして、「朝鮮近代史叙述における『文化史』の位置付けをめぐって～植民地期を中心に～」という題目でご講演いただくことになりました。

講演に先立ちまして私の方から簡単に、三ツ井先生のご紹介を申し上げます。三ツ井先生は、一橋大学の社会学研究科で修士課程・博士課程を終えられまして、その後、同志社大学等を経まして、2010 年から東京大学大学院総合文化研究科の言語情報科学専攻にお勤めになっていらっしゃいます。2022 年から教授として教鞭を取られていらっしゃいます。ご専門は、朝鮮の近現代史ということになりますが、特に植民地期の言語政策・文化政策を中心にご研究なさっています。お手元の資料にも業績が挙げられておりますが、主著と言えますのが、『朝鮮植民地支配と言語』という、先生の学位論文をもとにした著書がございまして、これは韓国でも翻訳・出版をされております。それ以外にも近年ですと、一番新しいのはお手元の資料にございます『植民地朝鮮のラジオ方法～近代マスメディアとしての京城放送局（JODK）～』という共編著でございますが、さらに少し前に韓国の金栄敏さんという方の著書である『韓国近代小説史 1890−1945』を翻訳なさいまして、東京大学出版会から刊行しておられます。本日は、先生のご研究を踏まえつつ、最近の朝鮮近代史における文化史の動向について幅広い視点からお話していただけるものと期待しております。

【三ツ井崇氏講演】

三ツ井崇氏： 只今ご紹介にあずかりました三ツ井崇と申します。同じ東京大学とはいえ駒場キャンパスの方で主に仕事をしておりますので、本郷の学生さんとの交流がないのですが、今日は新鮮な気持ちでお話させていただきたいと思います。

駒場キャンパスでは、ご存知の通り教養学部を抱えておりまして、学部1・2年生、3・4年生、大学院生と三層構造のところで、特にメインになっていますのは1・2年生の教養教育となっております。そこで、主に東大的な言葉で言うと韓国朝鮮語と言うんですけれども、語学の教育を中心に行なっております。3・4年生の課程には韓国朝鮮研究コースというのがありまして、そこで地域研究のコースがあるんですが、そこで韓国朝鮮社会文化論という講義を担当しております。

今からスライドの方を共有しながら進めさせていただきたいと思います。

はじめに

本日「朝鮮近代史叙述における『文化史』の位置づけをめぐって」と題しましてお話させていただきます。これは、文化史の研究動向というよりも、文化史なるものを実際に歴史叙述として書くときの、いわば私の悩みのような話になってきますので、今回全体的にお悩み相談的な話になってしまうのではないかなと若干危惧をしているのですけれども、実は歴史叙述を行うときに、この文化史の叙述というのが中々に難しいということがありまして、これをどうしたら良いかなと常日頃考えているものですから、それについて少しお話をさせていただこうかなと思っております。

東大は、先ほど言いましたように前期課程において韓国朝鮮語を教えております。それで、全員ではないのですが周りの学生の何人かに「なんで韓国朝鮮語を取ろうと思ったの？」と聞くと、最近は韓流・K-POPという答えがものすごく多いです。2010年度に来た時にも、そういう学生さんいましたけれども、そこまで多くなかったんですよ。この数年間で韓国朝鮮語の履修者数が増えました。といっても他の語学からすると少ないんですけれども、それでも増えてきたということがあって、明らかに変化があるということがわかります。また、特に大学院生とか若手研究者の方達と接する機会も多いんですけれど、特に駒場は、大学院は色々な専門領域、政治学の人とか文学の人とか美術の人とか言語学の人とか色々な人たちが、色々な専攻に散らばっているんですけれど、どういう経緯か詳しくお話することはないと思うんですが、仕事柄ですね、学位論文の審査に入るとか、そうでなくても、そもそも大学院のゼミの入ってくる学生さんたちの研究状況とかを見ますと、かなり分野が多様なんですよね。思想史、文学史、美術史、音楽、あとはメディアなど、様々な学生さんと接する機会があるんですけれども、主にいわゆる「文化」としてイメージされる領域の学生さんも結構多いんですが、その時に、いかに「文化」というものを学問として扱うかということを非常によく考えさせられるということがありまして、私は歴史学の研究をしていると世間的に見られておりますので、「文化」というものを歴史的文脈でいかに扱うかということに関して、すごく悩まざるを得ないということがあるわけです。「文化」というものを鉤括弧付きで書かざるを得ないことからもわかりますように、答えとしてすぐに何か出るようなものでもない。

私自身の悩みを申しますと、これまで朝鮮史の通史概説書であるとか、研究動向紹介のようなものを何度か書かせていただいたことがあります。そこにおける「文化」の問題をどう扱うかという苦悩と、何と言いますか、ぶっちゃけて言うと失敗のようなものがあるんですけれど、そういった所からまず話を進めていこうかなと思っております。

今回は朝鮮近代史と言いましたけれども、主に植民地期の歴史に限定してお話をさせていただこうと思いますが、そういった文脈の中で文化というものをいかに扱うかということについて悩んでいるということですね。ま

た、そもそも文化史って何なのだろうというかという問いが出てくると思うんですけれど、これが難しいんですね。何となくイメージされるものがあると思うんですけれど、ここが実は厄介なところでもあります。歴史叙述の本、特に通史概説の本、研究動向紹介の本とかは結構あるんですが、例えば文化史の叙述をどう書くから良いとか悪いとかいうことはなくて、これはやはりこれは書き手の関心によって色々なものが取捨選択されるもので、あまり他人が書いたものを評するという立場には私はあまりないので、自分が叙述に関わったものだけを取り上げて、とりあえずお話をさせていただこうかと思っております。

今この画面上に7つの文献が挙がっているかと思います。それぞれの中で、どういう苦労をしたかということ、あるいはどういう課題を抱えているかな、というようなことについて少しお話をさせていただいて、朝鮮近代史叙述における「文化史」の位置づけをめぐってということについて何をどう考えたらよいかという手がかりと言いますか、そういうものを得られたら良いなと思っております。

のっけから悩みだとか苦悩とかいっているので、どんなに暗い話になるだろうかということになろうかと思うんですけれども、苦悩の原因ですね、文化史を扱うということの苦悩の原因を一つ挙げますと、これはやっぱり、色々な領域があると思うのですけれど、その領域における専門性が非常に高い、もう方法論から資料の扱い方からして全部違うわけですよね。あるいは使う概念も違う。そういったところの専門性の高さというところがあって、それを一遍に網羅して統合的に扱うというのは相当な能力が必要になる。これはもう間違いないと思います。当然その歴史叙述の中で、文化というテーマを設けようとするとですね、複数の分野・領域にまたがって叙述をせざるを得ないということがある。そういう点で非常に難しいということがあります。また、文化史を歴史として、あるいは歴史学的に叙述するというのは一体どういうことなんだろうかという点も結構頭を悩ませる問題です。後で申し上げますけれども、色々な通史、概説、研究動向の本なんかを見ていますと、文化の扱い方というのは、扱う時代によってもそうですし、誰がどういう関心でその本を書くか、叙述するかによって大きく左右されるので、正直文化的な話はほとんどない叙述の概説書なんかも結構あります。だからいけないということではなく、それも一つのあり方なのかなと思いますが。

じゃあ、文化史の必要性ってどうだろうかということを私なりに考えてみますと、これは先ほど言った、韓流とかK-POPっていう問題が出てきていて、この間の大きな変化だと思います。グローバルな意味での大きな変化を表していると思うんですが、まず韓流やK-POPのイメージが先に来るんですけれど、これより前、つまり、韓流・K-POPという状態が出てくる以前の状況、植民地時代などの場合は葛藤の歴史になるわけですけれども、そういったものになかなか目がいかないという状態があります。忘却とか不在という言葉を使いましたけれども、これに対して若干歴史を勉強している者としては危機感を覚えるということがあるわけです。

最近、この山本浄邦さんの『K-POP現代史』という本が出ました。山本浄邦さんは、K-POPの専門家でもあるんですが、同時に近代の仏教と植民地支配との関係を研究している歴史家でもあるわけですね。この本を通しで読ませていただきました。色々K-POPや韓ドラを扱う本や研究書がたくさんあるんですけれども、この本の特徴としては、やはり歴史家として前史の部分と現代の政治・社会状況というのを踏まえて、それを現代の現象と繋げて分析するという意味で、非常に意義があるなという風に思いましたけれども、こういった叙述の形式というも参考にしながら、ある種の可能性というものも探っていけたらなというふうに思っています。

さて、中々「はじめに」から逃れられないんですけれども、「はじめに」の一番最後の項目で、そもそも「文化史」ってなんだろうなっていう問いが出てくると思うんですけれど

も、これが中々答えの出るものではなくて、その辺りは、もう少し議論を進めながら、また改めて考えてみたいと思っております。

1. 網羅性の確保、羅列からの脱却という課題

文化史なるものを叙述するという時に、今いくつかの課題があります。というのは、あらゆる文化領域に関して網羅的に書くということが要求される。一方で、それをやろうとするとどういう問題が起きるかというと、叙述がこの分野ではこういうものがありました、この分野ではこういうものがありましたという風な、羅列型になってしまうということなんですね。それが、ある意味歴史を叙述するという時に、あまり歴史の文脈の中で説明することができないという逆の葛藤を抱えてしまいまして、それがまたさらに網羅性というものを考える時には、そもそも文化史の範囲ってどこまでですかということになってくるわけですね。

で、『朝鮮史研究入門』という 2011 年の朝鮮史研究会編の本の研究動向の紹介についてです。研究入門というのは、過去に何回もありまして、朝鮮史研究会が主導して出していたものがありますけれども、これが今のところ最新版のバージョンの研究動向の本になります。この時に、ちょっと苦い思いをしたんですが、時代状況とか政治状況とか、植民地支配の状況はどう考えても政治状況の問題と関連をさせざるを得ないんですが、それとどう繋げて書くかということがある一方で、あらゆる領域を網羅的に書かなければいけないという問題ももう一つあって、その狭間で葛藤することになりました。私は開港期・大韓帝国期の「文化史・教育史」の中の「文化史」の部分、植民地期の「文化史・社会史・教育史」の中の「文化史・社会史」を担当することになったんです。ところが、これは内容をご覧いただければ多分わかると思うんですが、レジュメ 2 ページのところにもちょっと書きましたが、色々と項目を立てて網羅的に書こうとしたんですけれども、結果的にそれぞれの領域の記述を繋げて書くことができずに、羅列の状態に終わるという、そういう状態になってしまいました。そもそも「文化史」の範囲は？というところは先ほどから出てる問いなんですけれども、これはもうちょっと、あんまり具体的な話をすると差し障りはあるんですけれど、私にこの部分の依頼があった時にですね、どういう感じで依頼があったかというと、「三ツ井さん文化史のところよろしく」という感じだったんですね。「『文化史』って言われても」というところから入って、どうやったらいいんだろうとうことで、ここに書かれた項目というのは、基本的に私が私なりに考えて項目として立てたものということですね。このような形で立てたわけですけれども、まあ色々なご批判もいただきました。あの分野がないこの分野がないという批判は受けましたし、当然そうだろうなと思っていて、その批判は甘んじて受けざるを得ないなとは思っています。

ところがですね、結局その扱えなかった分野が多いというのは私自身の失敗であるというところはあろうかと思うのですけれど、一方で文化史って何ですかというところの議論が、あまり明確にされた形跡がないのも事実でして、そのまま進行したなという所があったのではないかというふうに思いました。特に、政治史・思想史・民族運動史・教育史などと色々関わる領域があるんですね。特に植民地期の文化運動というのは、民族運動の文脈とか思想史の文脈とかと関わってくるはずなんですけれども、そういった所との調整というのか相談とういうのか、そういうものが全くなく進行していたというのがありましたので、これはまあ、どうしても失敗をせざるを得なかったのだろうなというふうに思っています。ただですね、今、政治史・思想史・民族運動史・教育史などと関わる領域ということなのですが、思想史を扱わなかった理由としては、おそらく思想史は別の項目で立項されるだろうと私は思っていたんですね。そこに多分宗教という話もくっついてくるだろうと思っていたら、植民地の所に思想史が無かったという、そういう状態になっていたの

で、もっと確認をしないといけなかったなあと反省をしております。あ、別に朝鮮史研究会の悪口を言っている訳ではないんです。私、そこの幹事ですから、そういうことでは無いんですけれども、まあ一つの課題を抱えたなということになります。

ただまあ、文化的なるものを素材として歴史叙述を行うっていうことはその後も何度もありまして、私自身がその過程でかなり模索を続けているところです。今現在もそうです。特にですね、通史概説書の中に入れ込む入れ込み方っていうものに対しては、すごく神経を使っています。放送大学のテキスト二冊に執筆で関わらせていただいたんですけれども、今ここに上がっている二冊の本ですが、ここではですね、「民族運動・社会運動の展開」、「都市の形成と都市文化の拡大」、戦時期における「朝鮮文化の抑圧」という観点から断片的に記述をするということになります。分量も限られていますし、45 分の放送授業で全ての領域のあらゆることを入れるというわけにはいかないものですから、断片的にならざるを得ず、網羅性という観点からはほど遠くならざるを得ませんでした。これは、放送大学の学部のテキストなんですが、もちろん、近現代史の部分を通しで書きますから、どうしても政治史の話が中心にならざるを得ないという部分がありますので、これはある意味では仕方がないかなと思っています。

ちょっとレジュメの方とは順序が違いますが、一方で同じ放送大学でも大学院の授業があって、そちらの方も二冊関わらせていただきましたが、このテキストの中では一つ 2017 年のものでは「近代朝鮮の文化と政治」、そして下の 2020 年の方では「植民地支配と文化」ということを独立した章で叙述をして、網羅的には書けませんけれども、あるキーワードを立ててですね、そこで文化というものをその時代の文脈の中で語るかという試みを一応してみたつもりです。ただまあ、これもテーマが「文化と政治」に絞られていますので、網羅的とは言えない限界を抱えています。

その流れでですね、一番私が通史の叙述の中で文化史に関してかなり神経を使ってある程度分量を割いて書いたのが、『世界歴史大系・朝鮮史 2』の近現代の部分です。この部分ではですね、「植民地の文化と社会」という独立した節が設けられています。設けると書きましたが、私が独自で設けたわけではなく、そういう構成の案が来たので私がそれに則っただけなのですが。これはですね、ある程度記述のスペースがあるという意味では意味があるんですが、ここでも一つ問題になってくるのが、結局その他の政治経済分野の叙述の流れとブッツリ切れて文化と社会というのが出てきてしまう構成になっていますので、この時代状況とのつながりを見せるという意味では、少し効率が悪いという面もあるということですね。だからと言って、この前の部分に混ぜて書こうとすると、また書き方が違ってくるので色々な課題を抱えてくると思うのですが。結果として私がどういう風に対応したかと言うと、このような「日本語・日本的知識の流入」、「朝鮮文化運動の展開とメディア環境の変化」、「大衆文化・近代的文物の受容と限界」、「総督府による文化領域への介入」と、こういう項目分けをしたわけです。ところがこれは、逆の問題と言いますか、一度ご覧になっていただければわかると思うのですが、植民地期の歴史の叙述中で文化史の比重が物凄く大きくなってしまったということがあってですね、これはこれでまた別の反省をしなければいけなくなりました。このことに対しては好意的な評価を得た書評もあるにはあるんですけれども、ちょっと全体のバランスが悪くなってしまったかなと、そういう反省点がなくもないということです。

2. 「政治」としての「文化」
～朝鮮語規範化運動の問題を事例に～

先ほどから私が叙述の時の一つのキーワードとして挙げているのが、「文化」と「政治」という問題なんですね。これは、植民地の支配権力と被支配者との関係に働く力学というか作用の問題として挙げているところがあって、これは先ほどご紹介いただいた博士論文

のテーマ以来ずっと変わらない一つの関心事であるわけです。具体的にじゃあどういうイメージになるのかということを少しお話しした方が良いかなと思いまして、私が元々テーマとして進めてきている、植民地期の朝鮮語規範化運動、俗にハングル運動と言いますけれども、この問題を事例に考えてみようかなと思います。

ここに一つの図がありまして、これは朝鮮の近代において朝鮮語の規範化、ハングルの特に綴字法の形成過程を題材にしてですね、そこに支配権力と被支配者との関係がどのような動きとして現れるかということを研究した内容です。私はよくこの図を使うんですが、朝鮮総督府の学務局というですね、教育関係の官庁があるわけですけれども、そこが朝鮮人の教育に干渉していくわけですが、そこと朝鮮の知識層、特に言語学者を中心とする朝鮮の知識層との間の対立や協調の構図があるわけです。従来のイメージ、まあ変わりましたけれども、それでも一般的なイメージで言いますと総督府の言語支配というものが強圧的な支配があって、植民地期のハングル運動っていうのはそれに抵抗する運動であるというそういうイメージで語られると思います。何年か前に公開された「マルモイ」という映画がありますけど、あれがまさにその顕著な事例だと思いますね。細かい所言うと史実としては結構ツッコミどころが多い映画ですけれども、それを言い出すと一時間半以上かかってしまいますのでやめますけれども、そんな簡単なものではないということなんですね。もっと複雑な状況でした。

もちろん日本語普及を押し付けるわけなので、その意味での言語支配の強度は強くて、そういう国語の論理というものに対して、この民族語を形成し構築して守っていこう、そのこと自体は抵抗の論理であることは間違いない。論理としては抵抗なんですが、それを実際に実現する回路というのはそんなに簡単なものではないということを説明してきたわけです。また、色々なイメージの中で朝鮮の知識層のイメージというのは今のハングル学会につながる朝鮮語学会、1942 年に弾圧を受けましたけれども、そのイメージが強いと思うんですが、朝鮮の知識層の内部でも色々あって、この植民地期においては色々な見解がある中で、この植民地期においては二つの大きな勢力が運動の主導権争いをしているわけです。その過程に総督府の教育政策、朝鮮語政策の問題が絡んでくる。その構図をどう捉えるかということが大きい関心でした。

争点としてはですね、朝鮮総督府は「諺文綴字法（언문철자법）」という朝鮮語の綴字法を作るんですね。私が博士論文書く時に、とにかく何が争点かを説明するために、一所懸命綴字の分析をしていましたね。歴史家のつもりですけど。この朝鮮総督府の「諺文綴字法」の 1910 年代のやつというのは小倉文庫にその会議録があったのでですね、当時デジカメが高くて買えなかったので、一所懸命小倉文庫に通って筆写をした記憶がありますけれど、まあどうでもよい話ですが。その「諺文綴字法」というのは、1912 年、21 年、30 年という風に制定、改訂されます。これは、朝鮮総督府が作ったということ自体が何で？と思われるかもしれないですが、朝鮮人の教育を総督府が主導することになるわけで、朝鮮語科目っていうのは 1937 年まで必修科目でしたから、教科書を作らなきゃいけないということになって、総督府が主導して教科書を作らなきゃいけなくなるということがあったわけですね。それは要するに支配を効率化させるためのものですけれども、朝鮮の知識人、特に韓国の併合以前にチュ・シギョン（周時経）という有名な国語学者がいますけれども、その流れからナショナルな言語を作るっていうことで、活動していた知識人たちの研究があって、そう言った人たちはですね、やはり朝鮮人の教育に関わる部分ですから、総督府が一体どういうものを作ろうとしているのかということに対して物凄い関心を持つし、またその内容に対して色々な批判を加えるということがありました。そう簡単ではない問題があるわけですけれども、1930 年の「諺文綴字法」を作る時、何度か改正をした三回目

の綴字法の時に、この朝鮮人の主要な言語運動団体である朝鮮語研究会、のちの朝鮮語学会ですが、この朝鮮語研究会の人たちを大勢総督府の綴字法の審議の過程に呼んでですね、内容もガラッと変えて、つまり大部分その意見を入れて、1930年の綴字法というのを成立させるわけです。その3年後に朝鮮語学会がさらにそれを修正した「朝鮮語綴字法統一案（한글 마춤법 통일안）」というものを作るという流れがあるわけです。

2000年代の前半期、後半期くらいは、この問題に関してどういう議論が起こったか、特に韓国でどういう議論が起こったかと言いますと、韓国では従来この分野は国語学の人が国語学史で扱ってきたんですね。この国語学史の文脈では、この朝鮮総督府の綴字法の歴史的な位置付けというのが非常に曖昧でした。それはなぜかというと、基本的な枠として日本の支配に抵抗する存在として朝鮮語研究会や朝鮮語学会を描かなければいけないので、ここで総督府と協調している構図っていうのが歴史的に描きづらいということがあった。

ところが、主にこれを批判的にとったのが国文学の人たちでした。彼らは支配と抵抗とか二項対立的な歴史叙述というものに対して違和感を唱えてきた。それをまあ民族主義的な叙述というものに関しても相対化するという流れがあって、そういう中でこの1930年の綴字法における協調の構造っていうのをどういうふうに扱うかっていうのですごい論争になっていました。論争と言ってもほとんどすれ違いの状態でしたけれども。それはなぜかというと、やはり民族主義の運動団体が総督府と協力しているというのはどういうことなのか、「親日派」なのかという問題に繋がってしまうがために、これで色々な問題というか論争が起きたわけです。

私は、もともとあんまりその論争に関係がなかったんですが、博士論文を要約した論文を韓国で発表した後に巻き込まれていくことになってですね、私も結構大変なことになっていたんですけれども。この関わりの部分の問題が、どう解釈されるべきかということが争点になったわけです。

内容的に見ますと、今の韓国語のスペリングにつながるような、いわゆる形態主義の原則ですね、これが明確な方向性として位置づいたのが、この諺文綴字法の三回目（1930年）のものであり、次の朝鮮語綴字法統一案（한글 마춤법 통일안）なんです。その流れで見ると、形態主義の貫徹というか、それを貫徹する方向に動くという意味での内容面での連続性というところで評価をされるので、結局はその33年以降の朝鮮語学会の活動を称揚する、そういう流れの中で位置付けられていくので、「諺文綴字法」に関わったなんていうのはけしからんという話になるわけですけれども。しかし、そういうことではなくて、そもそも何でこういう構図が出てくるのかという分析を、もう少し歴史的に進めてみるとですね、総督府の教育や言論政策を背景とした、朝鮮総督府と朝鮮知識人、朝鮮知識人内部での対立や協力の構造というのがあるわけです。

要は総督府としても、前のもの（1921年のもの）でうまいものが作れなかったんですよ。一応総督府が作るんですけれども、諺文綴字法とはいえ、これは単なる綴り方の話を指針として出しているだけなので、法的拘束力もなければ何も無いですから、作ったは良いけれど、特に1920年代から広がっていく朝鮮語のメディア、新聞なんかでは一切使ってもらえないという。総督府系の御用新聞と言われた『毎日申報』でさえもきちっと従っていないという、そういうレベルのものですから、当然色々なところから批判を受ける。総督府としてはそんなものでは困るので、一応支持を得られるものを作らなきゃいけないから、そのためにどうするかというと、朝鮮の知識人たち、特に今力のある人たちに協力をしてもらおうという、そういう判断になっただけ。その協力した朝鮮語研究会の人たちも、他に色々対立している運動団体なんかがある中で、運動の主導権握るためには、ここである程度主張を取り入れてもらった方が良いという判断になったということなので、これを「親日」かどうかという議論をしても、あまり意味が

ないと私は思っていますけれども。そういうその様々な思惑が行き交う中で起きている現象なので、この民族主義的にどうなのかということだけで切ってもあまり意味がないと私は考えています。「支配と抵抗」とか、「抵抗と協力」といった、まあ「抵抗と協力」は多少あるかもわからないですが、「支配と抵抗」みたいな二項対立のところでは解決できる問題ではない、ということがあるわけですね。そこには、協力と抵抗というのが入り組んだ関係の背景と構造に関する分析を通して日本の植民言語支配の構造に迫ろうという意図が、私の中にはあったわけです。それは、言語をめぐるヘゲモニーの問題であると同時に、当時としてはその二項対立を止揚していかなければいけないという議論、「植民地近代性」論というのが政治史・社会史の部分で出てきていましたので、そういった成果をある程度意識した側面があると、私としては言えるかなというふうに思います。

先ほどから文化と政治の問題を、支配権力と被支配者に働く力学・作用の問題として捉え返すというふうに申し上げましたけれども、それは、植民地当局が朝鮮の言語環境に対して介入していく事例。日本語だけではなくて朝鮮語の領域にも介入していく、そういう事例として挙げられるわけですね。と同時に、植民地当局による支配の思惑と朝鮮知識人による運動の主導権確保という思惑もあって、これが相互に規定しながら動いていった事例だと言うことができる。

この当時私が一番強く主張したかったのは、言語支配というのは何も日本語普及政策だけではなくて、朝鮮語の領域にも起こっているんだけれども、それを政策として貫徹しづらい問題というのがあって、それがやはり朝鮮の言語運動なり、あるいは社会、そういった問題と規定関係を持たざるを得なかったという、そういうことを言いたかったということになるわけです。

ここまででお話ししたのは、私が専門としている言葉と社会とか言語政策とか、こういった領域の話ですけれども、実は朝鮮の文化領域に、植民地当局ないしは日本人が介入していく事例、あるいは朝鮮人のアイデンティティやナショナリズムの問題と相互規定的になるというのは他の領域でもあるわけですね。各種文化領域でも起こっていて、例えば文学作品であるとか、レコードとか色々な領域で検閲の問題というのが結構盛んに研究されました。あるいはその学問史・史学史の問題なんかもそうですね。日本人の学者が朝鮮をどういうふうな眼差しで見ていたのか、というのもそうでしょう。あるいは美術の世界でも、朝鮮美術展覧会なんかというのは、まさに視覚芸術に対してどういう眼差しが植民地に注がれていたのか、あるいは植民地の側はそれをどう解釈していくのか、というのが問題になっていくわけで、色々な領域でこういう構図というのは出てくるんだと思うんですね。この文化と政治の問題を私が扱うのは、結局一つのキーワードの中から文化史というものを領域横断的かつ統合的に捉えられるかということの試みというか課題を考えているというところが大きいと申し上げておこうかと思います。

3．「文化史」の可能性

次に、文化史の可能性というものを考えてみたいなというふうに思っています。文化史を論じるということにどういうメリットがあるか、どういう広がりの可能性があるかということをそれぞれ考えてみようかと思っています。で、課題としてはですね、これは冒頭にもいいましたけれども、それぞれの領域における専門性の問題があって、これを全ての領域において精通するっていうのは中々難しいところがあります。ただまあ、ある程度の知識が必要になってくるというのは言うまでもないです。また、それぞれの領域に内在する問題意識や論理というものがありまして、それをどう理解するかということと、その上で歴史の文脈をそこにどのように織り込んでいくのかという大きな課題が出てくることになるわけです。

それは文化の各領域を包む時代状況の語り

の問題というのがあるわけですけれども、資料の 2 というのを挙げましたが、私が後期課程の 3 年生の課程でやっている「韓国朝鮮社会文化論」という授業がありますけれども、そこで半期 13 回なのでできることは限られているわけですけれども、そういった時に、どういう形でやれば良いかということを模索しながらやっていて、その模索の事例を挙げたものです。

これは、通史概説の文脈のなかで文化史を書くという経験をしている者からするとですね、やはり領域横断的な文化史の可能性というのがあるのかどうか、というのが気になってくるわけです。それは先程も言いました各領域において内在する問題意識とか論理があるわけですけれども、そこから逆に共通のキーワードを探すことはできるだろうかということが、私の中で少し考えているところです。これをなぜ私が申し上げるかというと、先程言いましたように、大学院生たちの審査とかゼミでのやりとりとか聞いているとですね、同じ時代のことを扱っているのに、所属の専攻とかが違って顔を合わすことが無い。それで、私のゼミに入って初めてこんなことやってる人を知ったということがある。そういうことが多いんですね。でその時に、その学生さんたちがまず驚くのが、自分が行っている研究の分野のなかに貫徹した議論が、実はその分野に限った議論では無いということに初めて気づくということなんですね。私もそういう状況を見ながら、例えば審査に入ったりとかしますと、この問題は別にこの領域だけのことでは無いんだけどな、というようなことを考えながら色々言ったりしているということがありますけれど。なので、この概説のレベルである程度共通して領域横断的に現れる問題というのを、ある程度挙げておくというのも意味があるのではないかなと考えています。

先程言いました共通のキーワードですが、まず一つは教育とかメディアというツールの問題、あるいは文化接触、文化交渉といった現象など形式面の問題から入るということも、どの分野でもあることだと思います。もう一つ、各分野における分析の枠組みの問題から何か出てこないだろうかということをしばしば考えます。特にこの数年、いやそれ以上前から、色々な人の研究に触れる中でよく出てくるキーワードの一つが、植民地期の朝鮮文化における「郷土色」や「地方色」といった考え方、あるいは「ローカルカラー」というふうに言ったりもするんですが、こういった問題というのが色々な分野で出てくるんですね。どういう議論かと言いますと、帝国の位階秩序の中で朝鮮文化の位置、位置付け方とかその性格をめぐる言説や解釈の問題になってきます。いわば、その帝国日本の中の地方文化として朝鮮文化を位置付けるということの政治性の問題、またそれが非常に両義的な問題でもあるんですが、そういったことを問題にするような枠組みというか、そういう問題系で解く分野というのがあります。特に文学、映画、美術、言語社会論などの分野、これらは私が今まで接した中での話ですので、もっと他にもあるかもわかりませんけれども、こういった分野で結構出てきます。

この「ローカルカラー」の問題を考える時に非常に重要になってくるのが、植民地化された主体の自己表象が帝国の論理や価値観と接触するという側面があるんですね。どういうことかと言いますと、帝国の一地方として位置付けるということは、独自の国家でもなければ、独自の民族的な領域であるという位置付けを、少なくとも帝国の論理としては認めない。あくまで日本の地方であるという位置付けになりますから、その位階秩序を固定化する。やがて、それは日本文化に同化されていくものであるという考え方。要するに、支配する側の考え方があるという。こういった政治性がある一方で、そこに関わっている、まさに植民地化された主体の自己表象としては、そのローカルなところ地方的な位置に民族的な価値、あるいは文化というものを保存するというですね、そのことによって保存して消えないようにするという考え方が働いている。そのせめぎあいというか葛藤というか、

緊張関係みたいなものが、この問題では扱われてくることになります。また一方で、帝国日本に対してエキゾチックさや地方色が求められる朝鮮、これは支配する側、日本人の側が眼差す朝鮮のあり方ですね、こういったものが出てくる。こういう両義的な、あるいは多義的な問題を扱う非常に重要な考え方なんだろうと思うんですけれども、これは先程言いましたように諸刃の剣的な性格がありまして、帝国に同化・従属させる力学と、一方で地方として位置付けるところに翻訳不可能性かつ民族的表象をそこに顕在化させるという場にもなりうるので、その間の緊張関係が常につきまとうという、そういう考え方なんですね。これを統合的に論じて一つ文化史というものを打ち出していく可能性を持つ議論ではないかなと私なんかは考えています。かと言ってこれで叙述しろと言われると私ちょっと困っちゃうんですけれども、可能性をかなり秘めるところがあるなと私は考えています。

あと、この他にはですね、今帝国という言葉が出てきましたけれども、そもそも朝鮮というところだけではなくて、その他の植民地占領地も含めて帝国規模で文化史を理解するということの可能性も出てきています。今画面に出ていますのは、日本植民地研究会という所が出している『日本植民地研究の論点』という研究動向の紹介の本です。ここでも私がコラムを書いていて、芸能・歌謡について書いてくれと言われたんですが、芸能・歌謡はまだ文化史よりは、はっきりしているんですけれども、まあまた芸能と一口で言われてもどこまで扱って良いかわからないというですね。舞踊のようなものなのか歌の興行の話なのか、そういうのがあってですね、それを朝鮮だけではなくて他の地域も含めて書いてくれということになりましたので、これは結構大変な思いをしました。短いコラムでしたけれども、相当悩んで書きました。ただこれも通して読んでみますと、関連領域をつなげて書く視点というのが不足しているなという、そういう課題は否めませんでした。特に映画とかメディアとかっていうことの問題と芸能・歌謡というのはかなりつながる部分も多いので、そういったところをぶつ切りにしてしまったなという印象は否めなかったわけです。

さて、まとめに入りますが、文化と日本の植民地支配という問題を考えてみた時に、分析上の問題点が一つあるということがわかりました。わかりましたというか、そういうことが論じられています。山内文登さんが東洋文化研究所の紀要に、文明・文化という概念と植民地支配の性格をどう考えるかということで連載というか論文を書かれていてですね、まだ多分全部は終わっていないと思うんですが、こういうことを指摘されていました。読みますと、「植民地の固有性や差異性とは正反対に、本国への同化というニュアンスが、この『文化』という言葉には強く含まれているのだ。しかし既往の研究ではこうした用例をどう理解すべきかという問いが真剣に立てられること自体ほぼ皆無であり、大概は『文化』という括弧付きの表記で現在から見た語法の『違和感』や『非真正性』を示唆するに留まっている。さらにこうした同時代的な意味空間の問題に加えて、昨今の植民地研究では、「文化研究」の名のもと、研究者の専門に応じて実にさまざまな事象や過程――往々にして『政治』『経済』以外のすべてに――『文化』をあてがい論じてしまう現状が問題をさらに錯綜させている。」と書いていまして、まあ耳が痛い話だなというふうに思いましたけれども、私もなるほどと同意する側面も多い所です。

じゃあ、「朝鮮近代史における文化史って何なのか？」という問題に入るんですけれども、まず現象としていわゆる文化史、文化に注目する研究や関心が高まってきているのは事実だろうと思います。で、文化史の対象領域そのものも大きく変化をしてきているんだろうと思います。

またその文化史自体の方法的な転換というのもかなりあるんだろうということがあるわけですけれども、特に研究史的に言いますと、1990年代から2000年代までにかけての国民

国家論、あるいは帝国史、植民地近代性論といったような議論が、それまでの支配―被支配の問題を二項対立的に捉えてきたのをもう少し多元的に捉えようという流れが出てきたので、そういった流れの中で色々な新しい領域が出てきました。特にジェンダーに関わる研究とかまさにそういった研究の中の一つだろうと思いますし、私が専門としているような言語政策・言語社会の理論もまさにそうした流れの一つだったんだろうと思います。

そこにはですね、他分野との交流や越境の成果というものも非常に大きかった。特にこの文化史研究の領域を大きく変えたのは、韓国の国文学の研究の人たちの歴史の領域に入ってこようとする動きですね。そのこと自体がまた色々な緊張を生むことにもなっていますけれども、そういったもののある種の成果というのがあったのではないかなと思います。

ここでですね、ピーター・バークという研究者の『文化史とは何か』というそのものずばりの本があってですね、まあ読んでみたんですね。ただ、これはやはり欧米の歴史研究の中の文化史を整理しているもので、どこまで朝鮮史研究のなかにダイレクトに言えるかなというのは私の中にも答えが出ていませんけれども、彼はこういうことを指摘しています。「文化史は歴史家の独占物ではない。それは、学際的であると同時に他言的な学問領域を含む、いいかえれば、文化史は、多様な場所、多様な大学の学部のほか、学問の外でも実践されてきている。したがって、これまでみてきたように、『文化史とは何か』という設問に答えるのは難しいのだ。」で、さらにその「方向性を文化史のあまり馴染みのない隣接分野にまで拡げることが有益である。社会学、民俗学、書誌学、地理学、考古学、生態学、生物学などがここに含まれる。」というような言い方もしております。ここまで朝鮮史は行けるかどうか予想がつかないところがありますけれども、まあこういうことを言っています。そこで先程の朝鮮近代史における文化史とは何かという問題を考えますと、当然ここで答えを明確に求めることは多分出来ないんですけれども、先程冒頭からずっとお話ししてきたようなですね、私の失敗談とか悩みとかっていう問題と絡ませて言うとですね、歴史研究として、歴史学として、朝鮮史研究としてこの問題をどう受け止めるのかという問いをですね、そろそろ明確に出して真剣に考える時に来てるのではないかなというふうなことを考えています。それは、先程言いましたように、新たに文化なるものに対する関心が強く出てきている中で、そこからさらに歴史の問題へとつなげていく回路というものを歴史学の方では準備をせざるを得ないと思うんですけれども、まだそこに十分対応できている状況では無いのかなということを考えていまして、そこを私としてはですね、自らの問いでもあるんですけれども、その問いを発してですね、朝鮮史研究全体で考えて行けると良いのではないかなと考えております。

以上で、私の拙い話を終えさせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

司会（六反田豊氏）：どうもありがとうございました。今日は先生がこれまでご自身で取り組まれてきた文化史の領域ですが、そこの研究や歴史叙述をしていく中で、ご自身が模索しつつ悩みつつ来た足跡を踏まえながら、朝鮮近代史における文化史というものはいかにあるべきか、その可能性や提言のようなものをいただいたのではないかと思います。なかなか難しい問題だと思います。文化史というのはそもそも、文化史そのものが叙述に難しさを孕んでいる上にですね、特に朝鮮の近代史ということになると、そこに植民地支配という問題が入ってきてそういう状況の中で、文化史をどう叙述していくかとか、文化史をどういう風に近代史の中に位置付けていくかという問題についての先生なりのお考えをお話しいただいたものと理解しております。それではですね、これから質疑応答に入りたいと思います。いかがでしょうか。

質問者１：今日のご報告は、三ツ井さんご本人の携わってきた歴史概説書などにおける歴史の叙述ですね、そこで文化史をどのように書くべきかということで悩まれたというお話しが中心だったですけれども、一方で最後の方で少し触れられたように、これは歴史学の領域では無いのかもしれないですが、韓国では韓国文学をはじめとして近代史の一般向けの本なんかを見ますと、一時期と比べると随分植民地期の文化というものを扱った本が沢山出てきていると思うんですね。そういう中で、韓国の歴史学に限定されない幅広い近代の文化を論じるような学会状況の中で、何か文化史という観点で見た時に、新しい動きとかこれは参考になるなというものがありましたら、少し詳しくご紹介いただけるとありがたいと思うのですが、いかがでしょうか。

三ツ井崇氏：はい、ありがとうございます。今パッと事例が出てこないんですけれども、共同研究の場、あるいは分野を超えて共同で学術大会を開くっていうこと自体が非常に増えてきたと思います。私自身も結構そういう場に行ったりしていますので。それは、まあ韓国における研究費の状況とかそういった問題もあるとは思うんですけれども。そういった中で、分野を超えて交流をする際に、一方で資料の取り扱い方とか読み方とかの違いはどうしても感じるわけですね。解釈の仕方とかも含めて。そういった違いのようなものから緊張とか意見を言い合うとかいう場が出来てくることによって、お互いに方法論の認識と資料の読み方の可能性の広がりですか、そういったものを知ることができるというのが、私自身の経験としては、そこが非常に大きかったと思います。だからと言って私自身がどういうふうにやるかというのはまた別の問題ではあるのですけれども。今どういうことが争点になっていて、今なぜこのテーマに注目するのか、ということが歴史学以外の人から提起されることによって与えられる刺激というのはものすごく大きいというふうに思いますね。それは非常に重要な点だと思っています。

質問者２：私も教養学部の総合文化研究科におりましたもので、駒場における文化というものの扱い、教育の中における文化の位置づけということをめぐって色々話題にしたことがあります。で、特に文化人類学というものはほとんど唯一の「文化」というものを掲げた学科である、という教育理念を掲げてきたはずなんですが、そこにですね比較文化、比較文学というのが端を揚げまして、そこの学科が主催したシンポジウムに私が招かれまして、忌憚ない意見を言えと言われたものですから、忌憚なく申し上げたんですね。我々が文化をもって人間社会の多様な生き様を探ろうとする、一つの手がかりとして文化というものを考えてきたこと。それから、植民地ということがここで話題になっていますが、広い意味で植民地的な構図の中でですね、先進社会が後進社会や世界の、特にキリスト教の宣教師が宣教戦略の基礎として文化というものを掲げた。それが民俗学ですね、エスノロジー。民俗文化というもので、世界の多様な生活者を分類するというか記述するということで、対象化して実体化していく。それによって、ある社会集団とか地域とか言語とか、そういう何か共有した社会を実体化することによって、宣教の戦略とする。あるいは植民地支配の基礎にするという意味で、本来非常に戦略的で植民地主義的な意味合いを持ってきたものです。

そういったことも踏まえながらですね、一方では、社会プロセス、問題の解決の実態、目の前で起きている出来事とは別にですね、意味の世界・領域として文化というものを定義してきたんですね。システム・オブ・ミーニングスという言い方をしてきたんですけれども。まあ、そういうふうにですね、文化を設けて論じることによって我々は何が出来たか、何を目指してきたか、その限界はどういうことかということを文化人類学の教育では一応基礎として掲げてきたはずで、まあ授業

でそれを本格的に扱うということはありませんでしたが、それが基礎であったにもかかわらず、個別の文化、アーティファクツ、たとえば茶碗であるとか、そんなものを取り上げて文化と論じることはですね、文化をもって人間社会を構想し理解しようという大きな理念を無視するものだと言って、僕は比較文化、比較文学科に対して意義を申し上げたんですよ。文化という看板を降ろせというふうに言ったんですね。そしたら比較文化の方でもですね、確かにそうだと。我々は文化を本格的には扱っていないはずだと。比較文学はわかると、コンパラティブ・リテラチャーです。これはヨーロッパでもずっとあると。比較文化なんてものは元々世界には無いんだと。我々がいきなりそれを東大に旗揚げしたのは間違ったという声も比較文化の中から挙がりましたよ。そんなことがあってですね、今思い出すと大学の中でも文化という概念、あるいは教育における文化の位置づけと言いますか、文化を通した人間理解の構想をめぐってですね、なかなかそういう意義を申し立てたりですね、忌憚ない意見を言う場もなかったし、そうしているうちに文化史、文化というのは溢れて、三ツ井さんおっしゃる通りですね、なんでも文化になり、文化をみんな相当掘り下げないというような状況になっているように思うんです。今、植民地における文化の扱いという、植民地だけではなくて、実は文化というものを通してですね、何かを実体化していくということで、ある意味で介入、あるいは支配するという、そういうふうな関わりであってですね、非常に政治的な意味合いを含むことは確かであると思います。それが日本の国内においても見られたし、逆に文化を語ることによって地域のアイデンティティやソーシャル・バウンダリーを実体化しようとするような運動という側面を持ってきたのは確かだと思います。以上です。

三ツ井崇氏：はい、ありがとうございます。比較文化、比較文学と文化人類学のことで、文化をめぐる解釈の対立というか、そういうものがあったということは私も知らなかったのですが、今この仰っているお話しを伺って思ったのは、文化というものを突き詰めて考える機会というのが、実はもうかなり失われているのではないかということが、私の職場の今の状況を見るとですね、ちょっと思っていて。個々にそういう研究をしている人はいるかもわからないんですが、教育の場でそれをやれるっていうのは、今はあんまりちょっと難しいのかなという感じがしていて。これは記録に残して良いのかわからないのですが、駒場はまあ学際性をかなり重視するというふうな建前なんですけれども、かなり縦割り化してきているのではないかという批判もチラチラと聞きますね。要するに分野ごとに結局蛸壺化という言い方はあまり良く無いのかもしれませんが、相互に交流がない状況がどうも続いているんではないかと危惧されている先生も結構いらっしゃいます。

司会（六反田豊氏）：オンラインでご参加の方から、ご質問があるようなので読ませていただきます。三ツ井先生と同じ悩みを抱えています。政治・経済・社会はそれぞれ固有の学問分野として方法論が共通認識化されているのに対し、文化に対応する例えば文化学という分野が存在していないことが、文化史叙述の困難さあるいは不可能さの根底にあるのではないでしょうか。絵画史、音楽史、舞踏史などはそれぞれかなり独立性の高い分野で、共通の方法論が存在していないと思いますとお書きです。それでは三ツ井先生、よろしくお願いします。

三ツ井崇氏：おっしゃられる通り、文化学というものがないということは確かにあると思うんですけれども、だとすると文化史という概念そのものについても成立しうるのかという所が出てくるんだろうと思うんですね。基本的に文化史というものは、様々な専門性の高い分野のものを総合して語るものなのだと私は理解をしていますので、これが結局、政治・経済・社会といった問題と語り方の違い

が出てくるということなのかなと思っていますけれども、まあやはり困難であるということは言えると思います。

司会（六反田豊氏）：はい、ありがとうございます。では他の方でご質問おありでしたらお願いします。

質問者３：ご発表どうもありがとうございました。私も文化人類学が専門なのですけれども、元々文化って単数系の文化で、それこそタイラーあたりですと人間が社会の成員として獲得するあらゆる能力や慣習を文化と呼んだわけで、非常に人類学的には広いと思うんですけれども、他方で歴史で文化史という領域で論じられてきたテーマってもう少し何か焦点がないのかなと思いながら聞いていたんですよ。例えば、エートスであるとか時代精神であるとか、そういったものを共通に何か担っているような知識とか表象とかではないのかなと思うんですけれども、すみません、何かお考えがあったら教えて下さい。

三ツ井崇氏：えっと、歴史研究全体というか朝鮮史の文脈で言いますと、そもそも文化史とはなにかということを、あまりきちんと整理していないように思っていて、いわゆる大衆文化とか民衆文化とかっていう言い方はしますけれども、例えば精神史というのもありますけれども、表象の問題とかを歴史研究として扱うようになってきたのは、そんなに古くはないような印象が私の中ではあります。やはりそれはそれぞれの表象を扱う文化領域の影響をかなり受けて叙述するようになってきたのではないかなと思っていて。これはまあ、そもそも朝鮮史において文化史がどう扱われてきたかということの歴史学をやらないとですね、ちゃんとしたことは言えないんですけれども、それほどきちんと議論をされて、何かこれが文化史だと決めているということは無いような印象があります。それは『朝鮮史研究入門』の際に「「文化史」をよろしく」と言われた時の戸惑いを私は常に思い出すんですけれど、どこまでの範囲をすれば良いんですかというのが全く議論されないということと同じことなんだろうと思います。

質問者３：他方で世の中では文化史と言って何かしらのイメージというのは抱かれているわけでは無いのでしょうか。

三ツ井崇氏：どうなんでしょうね。決まって書かれるのは、文学史、美術史、音楽史、などわりあい既存の分野で研究成果の蓄積が多い分野がいくつかありますけど、それをブツ切りにして羅列するっていうかたちで書かれることがほとんどなので、あまりきちんと意識されているようには思えず、まさに曖昧としているというイメージが私の中にはありますね。すみません、明確なお答えができなくて申し訳ないです。

質問者４：＜＊＊＊＊＞な大きな書物の中に朝鮮民族という項目があって、朝鮮民族はこういう人々ですよと、この社会を特色付けるものは何かと。それは、民族の記述ごとに基準が随分違っていく所は問題ではあるんだけれど、まあ生態学的な基盤と結びついた生業である衣食住とかね、そんな所から始まって、言語・宗教とかそれでずっと書いたんですよね。それがあのヨーロッパで刊行された＜＊＊＊＊＊＞というこんな大きな本の中に、コリアンっていうのがあります。それが、世界規模で朝鮮を文化として捉えた非常に古典的なアプローチがあったと思うんですよ。それがまあ、東洋史の色々な例えば鮮卑だとか突厥だとかあるいは満州とか、みんなそれぞれそういうふうな民族的なものとして、それぞれ記述の対象になってきたわけですよ。我々もやはり最初はそれを普通に踏まえたんだと思いますよ、明治の頃とかですね。で、その後で色々な分野に応じて生業であるとか宗教であるとか言語、あるいは文学とか、そういう色々な表象に分けて細分化、専門化が進んできて、皆んなが文化史、文化史と言い出してきたんですよ。

三ツ井崇氏：ありがとうございます。この問題を考える時に、まさに今先生がおっしゃっていただいたことの関連で私がいくつか考えているのは、要するにそもそも文化史として何を語ってきたかということ自体をきちんと整理をしてみる必要があって、その上で考えていくということがないといけないんだろうなと思っていまして、それは私自身の仕事かもわからないんですけれども、少なくとも歴史研究の人たちの中でそれをもうちょっと進めていく必要があるかなと考えています。ありがとうございます。

司会（六反田豊氏）：所定の終了時刻になりましたので、そろそろこの辺で閉じさせていただければと思いますがいかがでしょうか。

今日は三ツ井先生に朝鮮近代の文化史に関わるご講演をいただきました。先生どうもありがとうございました。

それでは、最後に次回の予告をさせていただきます。次回はちょっと間が開きますが、11 月の 16 日の木曜日の同じ時間、18 時半から 20 時という時間帯に斉藤真理子さんにですね、ご講演をいただく予定になっております。まだ詳細は細かく決まっていない所はありますが、決まり次第みなさんにお知らせするようにしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは本日の、今年度第一回の東京大学コリア・コロキュアムはこれを持って終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。